

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 201

姥ヶ谷遺跡

一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査

2006

岡山県教育委員会

序

津山盆地の東半部に位置している旧勝田郡勝北町（現津山市）は、大きな河川が流れておらず、古来幾たびかの干ばつに見まわられてきました。そのため、灌漑用水を確保するために数多くのため池が造られてきました。これらのため池のうち県下最大級の規模を誇る塩手池の西側には、一般県道三浦勝北線が通り、地域住民の幹線道路として重要な位置を占めています。

このたび、一般県道三浦勝北線道路改築に伴い、路線内の周知の遺跡である姥ヶ辻遺跡についての取り扱いを協議してまいりましたが、保存することが困難であるとの結論に達し、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

姥ヶ辻遺跡は、調査面積は狭いものの、旧勝北町内で初めて発掘調査された古墳時代の集落跡です。検出された古墳時代の堅穴住居のうち1軒は、住居掘り方周縁に規則的に柱穴が掘られている形態を呈し、県内でも初出の事例となりました。また時代は新しくなりますが、近世の基壇状遺構も検出され、この地域の歴史を語る上で重要な遺跡となりました。

本報告書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、地元住民の皆様をはじめ、岡山県勝英地方振興局（現岡山県美作県民局）、勝北町教育委員会（現津山市教育委員会）からは多大な御助力を賜りました。記して深甚なる謝意を表する次第です。

平成18年2月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 松本和男

例 言

- 1 本書は、一般県道三浦勝北線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県勝美地方振興局（現岡山県美作県民局）建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した姥ヶ辻遺跡の調査報告書である。
- 2 当初は「姥ヶ辻古墓」として文化財保護法に基づく書類を提出していたが、「古墓」に相当する遺構が認められなかったため、本書から姥ヶ辻遺跡に遺跡名を変更した。
- 3 遺跡は、津山市市場字姥ヶ辻（旧勝田郡勝北町市場字姥ヶ辻）764-1ほかに所在する。
- 4 発掘調査は平成16年5～6月に小嶋善邦が担当して実施した。面積は250㎡である。
- 5 本書の作成は平成17年9月に実施し、小嶋が担当した。
- 6 本書の執筆・編集は小嶋が担当した。
- 7 本報告書に関係する遺物のうち、竪穴住居出土炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定については（株）古環境研究所に、石器石材の同定については岡山大学理学部 鈴木茂之氏に依頼した。記して厚くお礼申し上げる。
- 8 遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を受けた。
- 9 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書に使用した高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。また、遺構配置図等の座標値は日本測地系に、抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。遺跡付近の磁北は西偏 $7^{\circ}15'$ を測る。
- 2 本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一している。
 竪穴住居：1/60 基壇状遺構：1/100
 土器：1/4 石器：1/3 金属器：1/3
- 3 遺構番号は、全体にわたって遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。
- 4 遺物番号のうち土器・陶器についてはそのまま番号だけを付け、石器には**S**、金属器には**M**を番号の前に付けている。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。
- 5 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 6 遺構図における、被熱範囲等の点描については下記のとおりである。

被熱範囲 ……



炭化材断面 ……



- 7 一覧表における遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に準拠している。そのほか、本文中の土層の色調は調査担当者の記述による。
- 8 本報告書第4図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図の「橘」・「日本原」を複製し、加筆したものである。
- 9 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

目 次

序文
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 発掘調査および報告書作成の体制	2
第4節 日誌抄	3
第5節 報告書作成の経過	3
第2章 遺跡をとりまく環境	4
第3章 調査の概要	6
第1節 調査区の概要	6
第2節 古墳時代の遺構と遺物	6
第3節 近世の遺構と遺物	10
第4章 まとめ	12
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第7図 竪穴住居2 (1/60)	8
第2図 調査地位置図 (1/4,000)	1	第8図 竪穴住居2 出土遺物 (1/4)	9
第3図 調査区およびトレンチ配置図 (1/1,000)	2	第9図 近世遺構配置図 (1/200)	10
第4図 姥ヶ道遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5	第10図 基壇状遺構調査前地形図 (1/100)	11
第5図 古墳時代遺構配置図 (1/200)	6	第11図 基壇状遺構 (1/100)・出土遺物 (1/4・1/3)	11
第6図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)	7		

表 目 次

第1表	埋蔵文化財発掘の通知 (法第57条の3)	3	第4表	土器観察表	13
第2表	埋蔵文化財発掘調査の報告 (法第58条の2)	3	第5表	金属器観察表	13
第3表	埋蔵文化財発見通知 (法第59条)	3	第6表	石器観察表	13

図 版 目 次

図版1	1 調査区遠景(南西から) 2 調査区全景(南西から) 3 竪穴住居1炭化材検出状況(南東から)	図版4	1 基壇状遺構調査前風景(西から) 2 基壇状遺構調査前風景(南から) 3 基壇状遺構完掘(南から)
図版2	1 竪穴住居1完掘(南東から) 2 竪穴住居1北東側炭化材(北東から) 3 竪穴住居1北東側炭化材(北西から)	図版5	1 基壇状遺構完掘(北西から) 2 基壇状遺構黄褐色土叩き締め状況 (北東から) 3 江戸小学校6年生発掘体験
図版3	1 竪穴住居1北東断面(北から) 2 竪穴住居2(北西から) 3 竪穴住居2土器検出状況(北西から)	図版6	竪穴住居1・2、基壇状遺構出土遺物

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

一般県道三浦勝北線は、一般県道津山智頭八東線との交差点から一般国道53号日本原交差点までの総長約12kmと短いながら地域住民の生活道路として重要な役割を果たしているが、対面通行ができない幅員が狭い場所も存在している。このため、岡山県勝英地方振興局建設部では一般県道三浦勝北線道路改築のため、道路拡幅予定箇所に存在している埋蔵文化財の有無を岡山県教育庁文化財課に照会し、路線内に埋蔵文化財の対象地があることが分かり、平成16年度に文化財保護法に基づく協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存の処置を執ることになった。

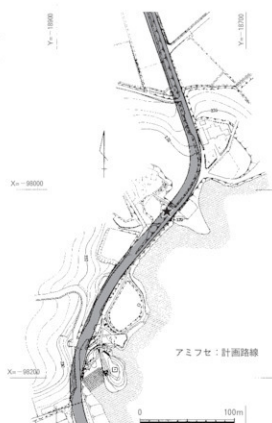
第2節 発掘調査の経過

当初、発掘調査は分布調査によって「古墓」とされていた高まりのみであった。しかし、「古墓」の調査と併行して、用地内の「古墓」南西側および北西側緩斜面の試掘調査（T-1～4）を実施したところ、T-2～4では表土層直下で地山面となり遺構が確認されなかったため全面調査の対象から外したが、T-1で古墳時代の遺構・遺物を検出したため、急速「古墓」南西側の緩斜面までも調査対象地とした。

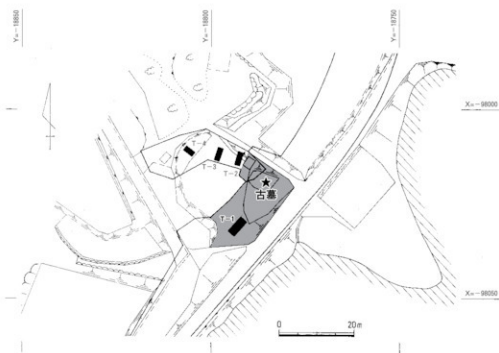


第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

アミフセ：旧勝北町域



第2図 調査地位置図 (1/4,000)



第3図 調査区およびトレンチ配置図 (1/1,000)

しかしながら、南西側緩斜面上には発掘調査前の条件整備である立木の伐採がなされていなかったため、この立木部分以外の全面調査終了後、一旦現場を撤収した。立木部分は立木伐採後の6月14日に調査を再開し、6月18日に調査を終了した。調査期間中には、5月26日に旧勝北町立広戸小学校6年生への遺跡見学および発掘体験を実施した。なお、「古墓」としていた遺構は、墓壇等の埋葬施設が確認されなかったため、基壇状遺構に遺構名を変更した。

第3節 発掘調査および報告書作成の体制

平成16年度（2004年度）

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

文化財課

課長 芦田 和正

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）平井 泰男

主任 小林 利晴

主事 秋山 良樹

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長（総務課長）内田 猛

参事 松本 和男

参事 伊藤 晃

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）笈本 弘忠

主任 小坂 文男

主任 小川 紀久

〈調査第二課〉

課長 中野 雅美

総括副参事（第二班長）島崎 東

主事 小嶋 善邦

（調査担当）

平成17年度（2005年度）

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁	
教育次長	釜瀬 司
文化財課	
課長	芦田 和正
参事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井 泰男
主任	小林 利晴
主事	金出地敬一
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	松本 和男
次長（総務課長）	内田 猛

参事	平松 郁男
参事	高畑 知功
〈総務課〉	
総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主任	小川 紀久
〈調査第二課〉	
課長	島崎 東
総括副参事（第二班長）	岡本 寛久
主任	小嶋 善邦
	（報告書担当）

第4節 日誌抄

平成16年5月6日（木）	資材搬入・調査開始	6月14日（月）	発掘調査再開
5月17日（月）	重機による表土掘削	6月18日（金）	発掘調査終了
5月26日（水）	発掘体験開催	平成17年9月1日（木）	報告書作成開始
5月31日（月）	現場一時撤収	9月30日（金）	報告書作成終了

文化財保護法に基づく提出書類一覧

第1表 埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の3）

番号	文書番号 目録	種類および名称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	主な指示事項
1	教文埋 第113号 H16.4.27	その他の墓	勝田郡勝北町市場 字姥・道763、764-1	200㎡	道路	勝美地方振興局長	H16.9.1～ H17.3.31	発掘調査

第2表 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第58条の2）

番号	文書番号 目録	種類および名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	岡古調 第54号 H16.5.6	その他の墓 姥・道古草	勝田郡勝北町市場	160㎡	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	小嶋善邦	H16.5.6～ H16.5.31

第3表 埋蔵文化財発見通知（法第59条）

番号	文書番号 目録	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第361号 H16.6.29	須磨器、土師器、 石器等 3箱	勝田郡勝北町市場字 姥・道 姥・道遺跡	H16.5.6～ H16.6.22	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備 文化財センター

第5節 報告書作成の経過

報告書作成は、平成17年9月にセンターにおいて調査員1名で実施した。まず、調査終了後未整理であった遺物の洗浄・注記から始め、終了後土器の復元・実測および写真撮影を行った。併せて遺構の下図・トレース作業も行った。最終的には堅穴住居2軒・基壇状遺構1基と、土器10点・石器1点・金属器1点を掲載した。なお、住居床面から出土した炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定の結果は本文中にその結果を記載している。

第2章 遺跡をとりまく環境

旧勝田郡勝北町（現津山市）は、津山盆地の東半部において吉井川の支流である加茂川の左岸に位置する。北側にはこの地方で「横仙」と呼ばれる標高1240mの那岐山、1075mの爪ヶ城山、791mの山形仙が東西に連なり、中国山地との境をなしている。旧勝北町は、この山形仙、爪ヶ城山の南側に開けた南北に長い町である。地理的には、山形仙、爪ヶ城山を高峰としてその南側には新旧の扇状地形の重なり合った山麓急斜面が標高400mから200mにかけて広がり、さらにこの南側には田柄川・広戸川・羽出川等3河川が緩やかな流れを見せる広大な平野部が広がる。そしてこの平野部を取りまくかのように周辺平野部との比高50m前後の日本原洪積層、第3紀層、さらに上・中・下の3段階に分類される河岸段丘等が散在し、平野部と交錯した独特の風土地形を展開する。

以下、旧勝北町の歴史と遺跡について時代順に簡略にまとめることとする。

今後発見されるであろうと想定されるが、旧石器時代の遺跡・遺物は確認されていない。現状では発掘調査が行われた池東・道田遺跡から出土した縄文時代前期の土器が最古の遺物である。また詳細な時期は不明であるが、同遺跡からは動物の解体を窺わせるサヌカイト製のスクレイパーが出土した落とし穴が検出されている。この他には縄文時代の遺構・遺物は確認されていない。

弥生時代では、前期の遺構・遺物は確認されていないが、中期後半になると山形福田遺跡・山の奥遺跡・西中亀座遺跡・西村水原遺跡などの遺跡が存在する。特に発掘調査が行われた山の奥遺跡では、堅穴住居・建物・段状遺構・墓など多くの遺構を検出し、丘陵頂部全域が集落であったと想定されている。西中亀座遺跡・西村水原遺跡はいずれも昭和50年前後の道路工事等による偶然的な土器片の発見であるが、山の奥遺跡のように集落の存在が予想される。後期では、天王山遺跡や池東・道田遺跡などがあり、前者は加茂川を一望する丘陵頂部付近から壺が出土しているようであり、詳細な出土状況が判明すればその土器が集落・墳墓のいずれかに伴っていたかの判断は可能であろう。

古墳時代は、墓地である古墳74基の存在が大きくクローズアップされる。中には時期等詳細は不明であるが全長22mの前方後円墳が原地区で確認され、小規模であるが他の円墳・方墳とは性格が異なり、ある時期当該地域を代表する首長の墳墓といえる。その他にも2～6基の古墳の地形的なまとまりによって古墳群が認識され、中でも西村古墳群（6基）、中村古墳群（15基）、杉の宮古墳群（5基）等は比較的多くの古墳から構成されている。古墳に比較して集落跡は、発掘調査されたものでは当該報告の姥ヶ道遺跡のみであり、さらに周知されている遺物散布地も8か所と少なく、これからの発見が期待される。また、古墳時代後半期になって発達するものに製鉄・窯業等各種手工業があるが、旧勝北町においては須恵器の生産が知られる。甲田池窯跡は、6世紀前半頃美作地方で最も早く須恵器を焼いた窯とされ、勝央町を中心に広がりが見られる勝田窯跡群の先駆的な存在として位置づけられる。

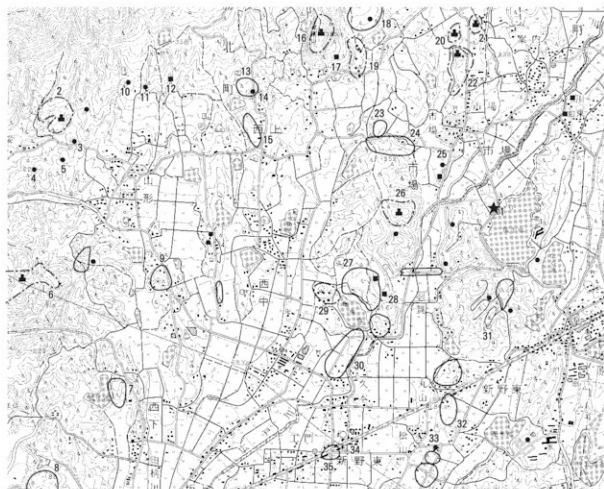
中世になると町内には南北朝時代以降、宝篋印塔・五輪塔・城跡等の分布が見られる。中でも工門地区の宝篋印塔には北朝の年号である康永2年（1343年）の銘が見られ、当時この地方一帯が北朝の勢力下にあったことを示唆させる貴重な資料として注目される。

室町時代から戦国時代にかけては全国各地で戦乱が頻発した時代である。これを反映して各地に戦

乱から自国の領土・村民・財産を守るための城が領主・村人によって数多く築かれた。勝北町においても文献に記載されたものだけで矢櫃城・仲山城・黒女城・金森城・本丸城・中西城・烏帽子形城・吹山城等13城が知られ、ほかに文献に記載されていない河原山城・国司尾館も存在している。

参考文献

- 『勝北町史』 勝北町教育委員会・勝北町市編纂委員会 1991
 「山形福田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』148 岡山県教育委員会 2000
 「西村古墳群」『勝北町埋蔵文化財報告』1 勝北町教育委員会 2000
 『改訂 岡山県遺跡地図』〈第8分冊 勝英地区〉 岡山県教育委員会 2003
 「山の奥遺跡」「池東・道田遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』180 岡山県教育委員会 2004



- | | | | | |
|----------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 姥ヶ谷遺跡 | 8 山の奥遺跡 | 15 夏目遺跡 | 22 本丸城跡 | 29 山寺古墳群 |
| 2 クレ塚 | 9 山形福田遺跡 | 16 烏帽子形城跡 | 23 国司山遺跡 | 30 川西遺跡 |
| 3 坂1号墳 | 10 大井手口古墳 | 17 メイバコ遺跡 | 24 吹山北麓遺跡 | 31 潘道池東遺跡 |
| 4 坂2号墳 | 11 ホウノ木先古墳 | 18 杉谷遺跡 | 25 亀座池北古墳 | 32 金竜遺跡 |
| 5 坂3号墳 | 12 グラリ遺跡 | 19 西村古墳群 | 26 吹山城跡 | 33 森塚古墳 |
| 6 黒目城跡 | 13 水原遺跡 | 20 河原山城跡 | 27 西中亀座遺跡 | 34 観音堂遺跡 |
| 7 池東純田遺跡 | 14 水原古墳 | 21 国司尾館 | 28 コトリン塚 | 35 新野東遺跡 |

第4図 姥ヶ谷遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第3章 調査の概要

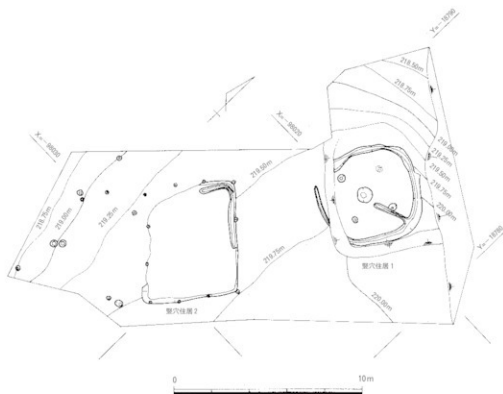
第1節 調査区の概要

調査地は、塩手池の西側に所在する山塊から北東方向に延びる幅狭い尾根の鞍部に所在している。調査区は、北東側が最高所で標高約220mを測り、南西および北西側に向かって低くなっていく。調査区の北東側では、尾根を断ち切って墓地への通路が造られていた。遺構は表土層直下で検出され、それらの検出状況から遺構上部及び包含層は削平ないしは流失している場所が多いと思われる。遺構は古墳時代の竪穴住居と柱穴、近世の基壇状遺構が検出された。遺物は検出された遺構の時期のもの以外に弥生土器も出土している。

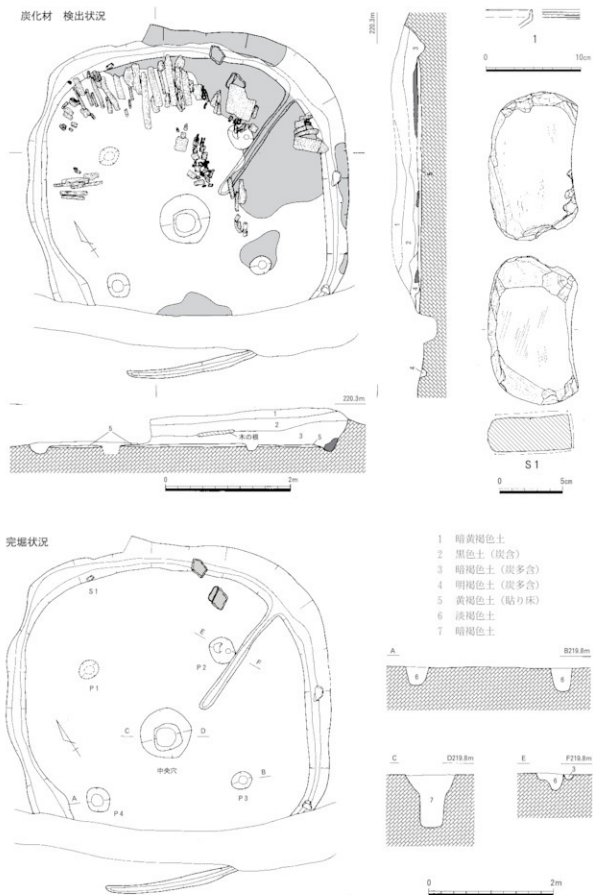
第2節 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居1（第5・6図、図版1～3・6）

基壇状遺構直下で検出された住居である。平面形は隅丸方形を呈し、その規模は長軸5.65m、短軸5.12mを測る。床面までの深さは北東側で最大46cmを測るが、北西および南西側では壁体溝のみの検出である。住居の面積は23.40㎡であった。住居北西部の貼り床上面からは、コナラ属コナラ節お



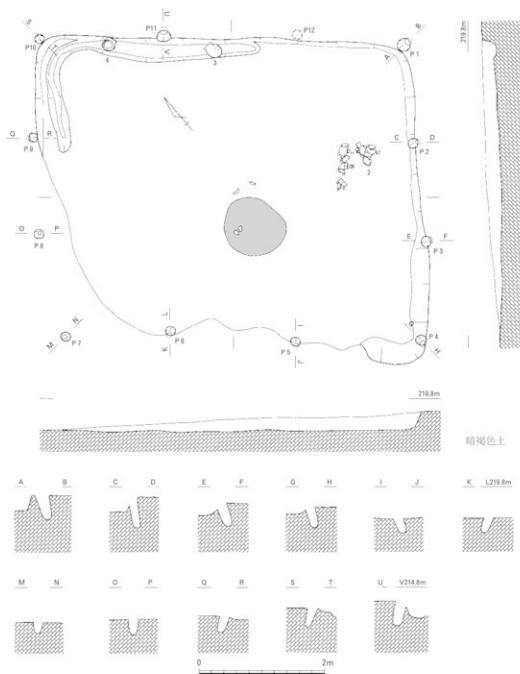
第5図 古墳時代遺構配置図 (1/200)



第6図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

よびコナラ属クヌギ節の炭化材が放射状に検出されている。しかし、この場所以外では木の根による攪乱でその痕跡を明瞭にとどめていない。床面と壁体および床面上の作業台と想定される石には被熱赤化が観察された。埋土はいわゆる黒ボク層であり、第3層中には炭片が多量に含まれているものの、焼土は顕著に認められない。床面からは中央穴と4本の主柱穴が検出されている。中央穴は径80cm、深さ82cmを測る。主柱穴のP1は木の根が入り込んでいたため径および深さは確認できなかったが、そのほかのP2～P4は径35cm、深さ30cm前後の規模を測る。また、床面には中央穴から東隅に向けて延びる幅15cm、深さ6cmの溝が壁体溝まで続いている。S1の砥石は床面から出土している。

遺構の時期は、住居の形態や埋土から出土した1の吉備型甕から、古墳時代初頭の時期を与えたい。



第7図 竪穴住居2 (1/60)

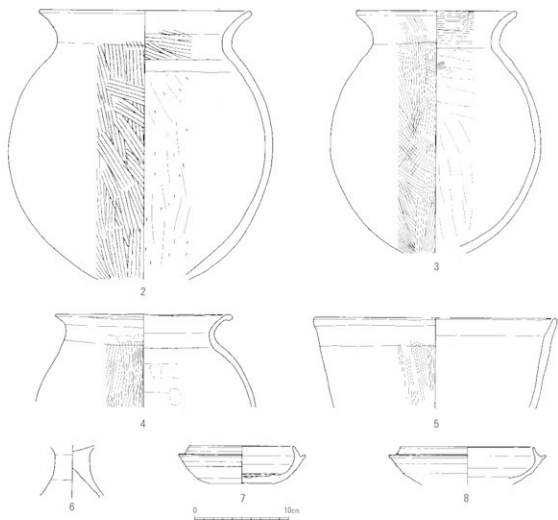
この年代観は、床面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果とも大きく矛盾せず、分析した5点のうちもっとも新しい年代で1850±40(補正¹⁴C年代)とAD70～250年(2σ暦年代)の分析結果が得られている。

竪穴住居2(第5・7・8図、図版3・6)

竪穴住居1から約5m南西に所在している。おそらく平面長方形を呈していたと思われる竪穴住居で、南西側は住居床面まで削平されていた。現状での規模は長辺5.97m、短辺5.03mを測る。検出面からの最大の深さは北東側で約25cmであった。床面中央部には97×90cmの範囲で被熱赤化が認められた。柱穴は床面上には認められなかったものの住居掘り方の周縁に沿って検出され、住居の4隅に1本ずつ、そしてそれらの間に等間隔で2本ずつ配置されていた(ただしP12に関してでは想定される柱穴の位置に木の根が入り込んでいたため確認できなかった)。これらの柱穴の多くは、約70°～80°の角度で掘られている。

図化している2～4、7・8は床面直上から検出されており、7・8の須恵器は被熱面およびその周囲からの出土である。

遺構の時期は遺物から古墳時代後半に比定される。



第8図 竪穴住居2出土遺物(1/4)

第3節 近世の遺構と遺物

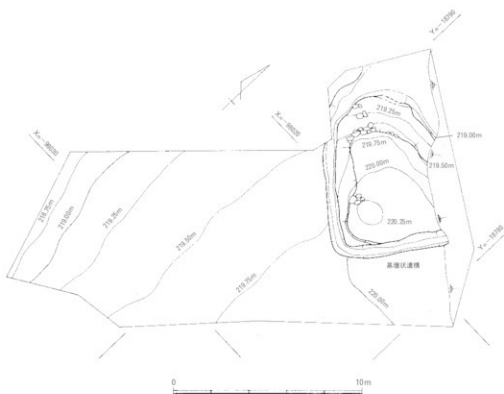
基壇状遺構（第9～11図、図版4～6）

調査区の北東隅で検出された遺構で、北東側は後世の削平により消失している。規模は現状で長軸10.1m、短軸6.4mを測る。マウンドの裾部には周溝と想定される溝が検出されており、築造時には「コ」字状を呈していたと思われる。周溝は遺構の背・側面と想定している南東・南西側では幅約50cm、深さ約30cmの規模で直線的に掘削され、正面では緩やかに屈曲しながら開放している。周囲との比高差は、正面では約1.6m、背面では約30cm（周溝底部からは約60cm）である。

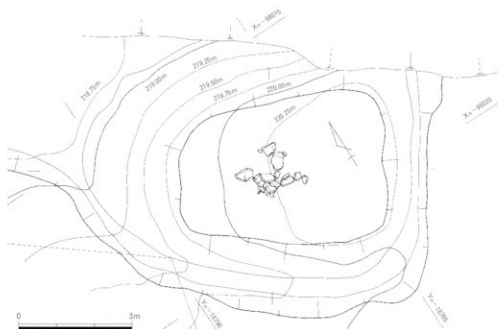
遺構の頂部では、6×5m程の長方形を呈する平坦面が認められた。この平坦面の北西側、平坦面から斜面部へと変わる地点には、30cm前後の角礫を使用している一部2段積み石垣が検出された。またこの石垣より北西側の斜面部には、30cm程度の扁平な石を2個据えている、階段状の石列が2列認められた。石垣から約3m南東側までの平坦面上の範囲および北西・南西側斜面部の一部には、遺構表面に地山土と思われる黄褐色土を叩き締めている状況が確認され、その厚さは最大で5cmを測る。その他に頂部付近には、30～20cm大の角礫が4個置かれていた。

出土遺物は少なく、3点ほど図示し得たのみである。9・10は周溝南西辺から出土した18世紀前半頃の底部糸切りの備前焼小皿であり、9の口縁部には煤痕が3箇所認められた。M1は右側縁部が折り返されている鉄器であるが、その器種等は不明である。

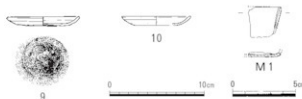
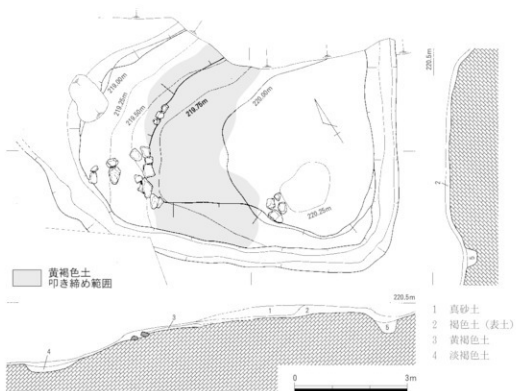
なお、発掘調査前の状況は周囲より約80～50cm程高いマウンドを呈しており、頂部付近の表土上には40～10cm前後の石が十数個と、真砂土によって充填されていくばみが確認されている。



第9図 近世遺構配置図（1/200）



第10図 基壇状遺構調査前地形図 (1/100)



第11図 基壇状遺構 (1/100)・出土遺物 (1/4・1/3)

第4章 まとめ

今回発掘調査を行った姥ヶ道遺跡は、旧勝北町内で初めて発掘調査された古墳時代の集落跡である。遺跡からは古墳時代の竪穴住居2軒と近世の基壇状遺構1基が確認された。これらのうち**竪穴住居2**と**基壇状遺構**について若干の補足説明を行い、まとめとしたい。

竪穴住居2

この竪穴住居の特徴は、柱穴が住居床面内からではなく住居掘り方の縁辺に沿って検出され、その配置が住居4隅に各1本づつおよびその間にほぼ等間隔で2本づつ位置しており、その掘り方の角度が垂直または約70°～80°を測り、さらにその規模が径15～20cmと小さいということが挙げられよう。では、これらの柱穴の用途・性格について考えてみたい。

まず、柱穴が住居上屋構造¹⁾の柱ないしは垂木のためのものとした場合では、柱穴の傾斜角のままでの交点は床面から6m以上の高さとなり、通常復元されている住居の高さより遥かに高い上屋となるため、住居上屋構造の骨材のための柱穴とは想定しにくい。また、各柱穴がいわゆる主柱穴の用途を持っており、柱穴に差し込まれた柱に直接梁・桁を据えた場合では、傾斜している柱で屋根材が支えられるのか、つまり十分な強度を保てるのか疑問である。よって現状では、住居壁体の板または上屋構造の骨材を補助的に支える²⁾杭ないしは柱のためのものの可能性が高いが、管見ではこのような柱穴配置を呈する住居の調査例³⁾がなく、類例の増加を待ちたい。

基壇状遺構

基壇状遺構は、旧地形を利用しながら地山を若干削り出して造られていると想定され、背・側面側では約30cm、正面では約1.6m程周囲から高く、頂部に現存で6×5m程度の平坦面が認められる。この平坦面の北東側、遺構正面には土留めおよび平坦面の区画を意図したと思われる石垣が据えられており、また、現状では流失している箇所が多いものの平坦面および遺構前・側面の斜面部には版築ないしは地山面の保護・化粧と想定される黄褐色土が叩き締められていた。さらに遺構の頂部へ向かうための階段状の石列も検出されている。

さて、この基壇状遺構という名称は便宜的に付けたものであり、遺構の性格を正確に反映しているとは限らない。「基壇⁴⁾」と呼称するにおいては、そこに建築物がたっていないくはならないが、今回の調査では礎石等の建物の基礎と推測される遺構は検出されてはいない。しかしながらこの遺構に関しては、遺構正面に階段状の石垣が検出されていることや地元の口承で遺構に「若宮様」という名称が付けられていたこと、さらに旧地権者の関係者がこの場所に小さな祠を安置していたことなどから、平坦面上には何らかの建築物が存在していた可能性を指摘できよう。

注

- (1) 上屋構造の復元に際しては、主に下記の文献を参考とした。

浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』同成社 1998

笹森健一「住まいのかたち」『季刊考古学』32 鎌山閣 1990

都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989

宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996

山本輝雄「住居の上層構造と建築材」『古墳時代の研究』2 雄山閣 1990

(2) 前提として4本の支柱が必要であるが、柱穴平面形掘り方が住居掘り方の辺にすべて直交しているもので、支柱に梁・桁を架け、各柱穴は梁・桁を補助的に支える柱または杭のもの。

(3) 関東地方の古代の住居には、「堅穴外柱穴」と呼ばれている柱穴を持つ住居が確認されているが、本遺跡とはその形態や時期が異なっている。

桐生直彦「和田西遺跡の古代建物—堅穴外柱穴と棚状施設を中心に—」『和田西遺跡の研究』考古学を楽しむ会 2003

(4) 小田富士雄「基壇」『新考古学講座』第8巻 雄山閣 1979

第4表 土器観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	形態・手法の特徴など	備考	実測番号	
				口径	底径	器高					
1	堅穴住居1	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙 (10YR7/3)	口縁部：縞縞き沈線5条		6	
2	堅穴住居2	土師器	甕	20.2	—	—	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリのちナデ	ほぼ完形	15	
3		土師器	甕	16.6	—	—	にぶい黄橙 (10YR5/1)	外面：タテハケメ 内面：ナデ 口縁部：ヨコハケメ		13	
4		土師器	甕	17.6~18.3	—	—	黄灰 (2.5YR6/1)	外面：タテハケメ 内面：ナデ		14	
5		土師器	瓶	(15.7)	—	—	にぶい黄橙 (10YR6/4)	口縁部：ヨコナデ 外面：タテハケメ		1	
6		土師器	高杯	—	—	—	橙 (7.5YR6/6)			2	
7		須恵器	杯	11.0	10.6	4.0	灰 (5Y6/1)	ロクロの回転：時計回り			3
8		須恵器	杯	14.1	—	—	灰 (5Y6/1)				4
9		基壇状遺構	備前焼	皿	7.5	3.9	1.1	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	底部系切り	3か所に煤付着完形	11
10	備前焼		皿	7.1	4.7	1.0	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)			12	

第5表 金属器観察表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重さ (g)	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	基壇状遺構	不明	26.0	24.0	2.0	3.34	近世	

第6表 石器観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存率	時期	備考
				長さ	幅	厚さ				
S1	堅穴住居1	砥石	流紋岩	118	71	39	427.75	完形	古墳	3面使用

1 調査区遠景
(南西から)



2 調査区全景
(南西から)



3 竪穴住居 1
炭化材検出状況
(南東から)





1 竪穴住居1 完掘
(南東から)



2 竪穴住居1
北東側炭化材
(北東から)

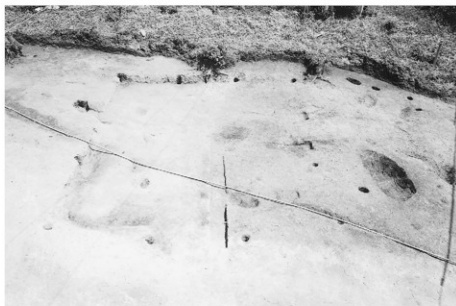


3 竪穴住居1
北西側炭化材
(北西から)

1 竪穴住居1
北東断面
(北から)



2 竪穴住居2
(北西から)



3 竪穴住居2
土器検出状況
(北西から)





1 基壇状遺構
調査前風景
(西から)



2 基壇状遺構
調査前風景
(南から)



3 基壇状遺構完掘
(南から)

1 基壇状遺構完掘
(北西から)

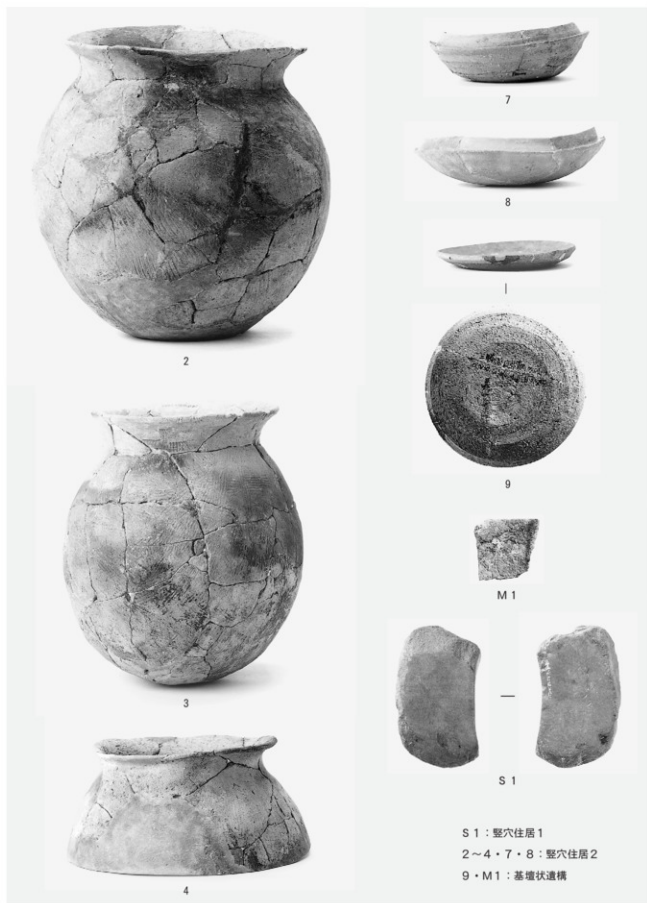


2 基壇状遺構
黄褐色土叩き締め状況
(北東から)



3 広戸小学校6年生
発掘体験





竖穴住居1・2 基壇状遺構出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	うばがさこいせき							
書名	姥ヶ道遺跡							
副書名	一般県道三浦勝北線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	201							
編著者名	小嶋善邦							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3					TEL 086-293-3211		
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6					TEL 086-224-2111		
発行年月日	2006年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
うばがさこいせき 姥ヶ道遺跡	岡山県 津山市 市場 字姥ヶ道 764-1ほか	33203	336240141	35度 7分 9秒	134度 7分 26秒	20040506～ 20040618	250	一般県道 三浦勝北線 道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
姥ヶ道遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居	須恵器 土師器 石器		住居址掘り方周縁に沿って 柱穴が検出される。		
	祭祀跡	近世	基壇状遺構	備前焼 金属器				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 201

姥ヶ辻遺跡

一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査

平成18年2月20日 印刷

平成18年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7

